

第1章 歴史的・地理的環境

第1節 遺跡の位置と周辺遺跡

鹿田遺跡は、岡山市街地の南部に位置する岡山大学鹿田地区（岡山市北区鹿田町2丁目5番1号）のほぼ全域にわたって広がる縄文時代～近世の複合遺跡である。同遺跡は、岡山県中央部を走る旭川が形成した岡山平野の南端部にあたる、河口近くの三角州上に立地している。現在の旭川は本遺跡の東方約1kmを児島湾に向けて南流しているが、かつては岡山市街地の北東から南西にかけて幾筋かの河道となって網流していたと考えられる。現在、鹿田遺跡は海岸線から北に約7.5kmの距離を有するが、中世以前には、遺跡の南側近くに海の影響が及んでいたと想定される。

本遺跡周辺における人間活動の痕跡は旧石器時代にまでさかのぼる。旭川を挟んで対岸の操山山塊ではナイフ形石器が採集されている⁽¹⁾。縄文時代では、本遺跡が所在する岡山平野北端を画する半田山丘陵南端に位置する朝寝鼻貝塚で前期の生活痕跡が確認されている⁽²⁾。その中で、人間活動が本格化するの縄文時代後期前葉以降である。代表的な遺跡を挙げると、後期前葉～同中葉の堅穴住居や貯蔵穴群などが検出された津島岡大遺跡⁽³⁾、後期中葉の貯蔵穴群などが調査された百間川沢田遺跡⁽⁴⁾がある。いずれも丘陵付近のエリアに限定されるが、これらは一時的な中断を挟みながらも弥生時代前期に向けて継続する。

弥生時代前期では津島岡大遺跡⁽⁵⁾、津島遺跡⁽⁶⁾、北方遺跡群⁽⁷⁾や百間川沢田遺跡・原尾島遺跡⁽⁸⁾において、水田遺構が検出されている。弥生時代早期とされる津島江道遺跡⁽⁹⁾の水田は時期についての評価が確定していないが、水稻農耕の情報が岡山平野に早い段階にもたらされ、受容されていたことは確実であろう⁽¹⁰⁾。

集落は、前期前半は津島遺跡に限定されるが、その後、南方遺跡⁽¹¹⁾、雄町遺跡⁽¹²⁾、百間川沢田遺跡、同原尾島遺跡⁽¹³⁾などが出現する。さらに遺跡数が増加していくのは中期以降である。中期～後期の沖積作用の進行に伴う微高地形成と連動するように新たな集落が展開する。その結果、旭川西岸における遺跡の分布は、半田山と京山丘陵のふもとに広がる北群と、臨海性の高い南群に二分される。前者では、前期末葉～中期前葉の代表的な集落である南方遺跡から、絵図遺跡⁽¹⁴⁾、上伊福九坪遺跡⁽¹⁵⁾、上伊福遺跡⁽¹⁶⁾へと集落域が拡大しつつ移動し、後期には津島遺跡や伊福定国前遺跡⁽¹⁷⁾などを含めた広い範囲に中核的集落が形成される。また、南方釜田遺跡⁽¹⁸⁾では、中期前後の円形周溝墓や中期中葉の区画墓が検出されるなど、拠点集落の一角に墓域が設けられることも判明している。

対して、旭川下流の臨界性の高いエリアでは、中期後葉に鹿田遺跡⁽¹⁹⁾、後期には天瀬遺跡⁽²⁰⁾が加わった遺跡群のまとまりを認めうる。旭川の東岸では、雄町遺跡などのように前期から継続的に後期に至る遺跡が多いが、その平野南端に位置する百間川遺跡群では、中期に同兼基・今谷遺跡⁽²¹⁾、後期に同原尾島遺跡へと中心が移動する。

旭川下流域における墳墓は、弥生時代末～古墳時代前期には、平野部周囲の丘陵あるいは山塊上に数多く築かれ、複数の首長系列の存在を示唆する。鹿田遺跡が立地する旭川河口付近の古墳時代の首長系列としては、遺跡を見下ろす操山山塊の尾根上に位置する操山109号墳・網浜茶臼山古墳⁽²²⁾の系列が該当する⁽²³⁾。造墓活動は古墳時代前期後半に最盛期を迎え、神宮寺山古墳⁽²⁴⁾、金蔵山古墳⁽²⁵⁾、湊茶臼山古墳⁽²⁶⁾という全長150m級の前方後円墳を生み出す。その後、中期前～中葉において築造は一度低調化するものの、中期後葉～後期前葉にかけてはお塚様古墳や塚前古墳といった全長50m前後の前方後円墳が隣接して築かれたとみられる⁽²⁷⁾。後期中葉に入ると、周囲の山塊に中小の横穴式石室墳が群集して築かれるようになる。

古墳時代前期の集落は、百間川遺跡群や津島遺跡一帯に展開するなど、弥生時代後期からの状況が、遺跡・遺構数の増加傾向を伴いつつ踏襲される。しかし、中期以降には規模の縮小傾向が一部の地域で指摘される。特に、旭川西岸のうち南群ではその傾向が顕著に認められる。古墳時代前期まで拠点をなしていた鹿田遺跡も、当地域



★ 本調査地点

1. 鹿田遺跡 (縄文～近世)
2. 津島岡大遺跡 (縄文中期～近代)
3. 田益田中 (国立岡山病院) 遺跡 (縄文～近世)
4. 白壁奥遺跡 (古墳後期) (製鉄)
5. 津高住宅団地内遺跡群 (古墳他) (製鉄遺跡群を含む)
6. 佐良池古墳群 (古墳後期)
7. 播鉢池古墳群 (古墳後期)
8. 奥池古墳群 (古墳後期)
9. ダイミ山古墳 (古墳中期?)
10. 津島3丁目第1地点 (弥生・古墳)
11. 宿古墳群 (古墳前期・後期)
12. 片山古墳 (古墳前期)
13. 坊主山遺跡 (古墳～室町)
14. 首部 (白山神社) 首塚 (鎌倉～室町?)
15. 鳥山城 (笹ヶ迫城) 跡 (室町)
16. 七つ坑墳墓・古墳群 (弥生～古墳)
17. 都月坂墳墓・古墳群 (弥生～古墳)
18. 半田山城 (戦国)
19. 津島福居遺跡 (古墳～室町)
20. 塚前古墳 (古墳中期?)
21. お塚様古墳 (古墳中期)
22. 津島東遺跡 (縄文～室町)
23. 朝寝鼻貝塚 (縄文前～後期)
24. 一本松古墳 (古墳中期)
25. 不動堂古墳
26. 妙見山城跡 (戦国)
27. 麓田遺跡 (弥生他)
28. 三野宮之段遺跡 (鎌倉・室町)
29. 津島新野遺跡 (弥生)
30. 津島江道遺跡 (縄文～近世)
31. 北方長田遺跡 (弥生～近世)
32. 神宮寺山古墳 (古墳前期)
33. 青陵古墳 (古墳前期)
34. 十二本木塚古墳
35. 石井庵寺 (奈良?～室町)
36. 関西高校裏山古墳群
37. 津倉古墳 (古墳前期)
38. 妙林寺遺跡 (弥生)
39. 上伊福西遺跡・尾針神社南遺跡 (弥生～平安)
40. 津倉遺跡 (弥生)
41. 津島遺跡 (弥生～近世)
42. 北方下沼遺跡 (弥生～室町)
43. 北方横田遺跡 (弥生～室町)
44. 北方中溝遺跡 (弥生～室町)
45. 北方地藏遺跡 (弥生～近世)
46. 北方蔵ノ内遺跡 (弥生～近世)
47. 北方上沼遺跡 他 (弥生～近世)
48. 上伊福遺跡・伊福定国前遺跡
49. 上伊福遺跡 (弥生・古墳)
50. 絵園遺跡 (弥生～平安)
51. 南方遺跡他 (弥生～近世)
52. 広瀬遺跡 (弥生)
53. 上伊福 (立花) 遺跡 (弥生～室町)
54. 大供本町遺跡 (古代～近世)
55. 大供東浦遺跡 (弥生～室町?)
56. 鹿田 (県立岡山病院) 遺跡 (平安～鎌倉)
57. 岡山城跡 (室町～近世)
58. 岡山後楽園 (江戸)
59. 天瀬遺跡 (弥生～近世)
60. 新道遺跡 (奈良～近世)
61. 二日市遺跡 (弥生～近世)
62. 竜ノ口山頂古墳群 (古墳後期)
63. 湯迫古墳群 (古墳前期)
64. 四御神奥池奥古墳群 (古墳後期)
65. 四御神奥池下古墳群 (古墳後期)
66. 四御神谷口古墳群 (古墳後期)
67. 備前車塚古墳 (古墳前期)
68. 上の山1号墳 (古墳中期)
69. 唐人塚古墳 (古墳後期)
70. 賞田庵寺 (飛鳥～室町)
71. 百間川二の荒手遺跡 (近世)
72. 中島遺跡 (鎌倉～江戸)
73. 宮南遺跡 (鎌倉～近世)
74. 国長遺跡 (平安～近世)
75. 天神河原遺跡 (弥生～室町)
76. 備前国府関連遺跡
77. 備前国庁跡 (奈良～平安)
78. 備前国府推定地 (南国長) 遺跡 (弥生～鎌倉)
79. 南古市場遺跡 (奈良～平安)
80. 北口遺跡 (弥生～室町)
81. ハガ (高島小) 遺跡 (奈良～室町)
82. 中井・南三反田遺跡・古墳群 (弥生～室町)
83. 原尾島遺跡 (弥生～室町)
84. 赤田西遺跡 (弥生～室町)
85. 幡多庵寺 (飛鳥～平安)
86. 清水遺跡 (弥生～室町)
87. 雄町遺跡 (弥生～古墳)
88. 乙多見遺跡 (弥生)
89. 赤田東遺跡・関遺跡 (弥生～室町)
90. 関遺跡 (弥生)
91. 百間川遺跡群 (縄文～近世)
92. 百間川原尾島遺跡 (縄文中期末～近世)
93. 百間川沢田遺跡 (縄文中期～近世)
94. 百間川兼基遺跡 (弥生～室町)
95. 百間川今谷遺跡 (弥生～古墳)
96. 操山古墳群 (古墳後期)
97. 妙禪寺城跡 (戦国)
98. 操山219号遺跡 (旧石器)
99. 金蔵山古墳 (古墳中期)
100. 兼基島坂遺跡 (弥生)
101. 網浜庵寺 (飛鳥～平安)
102. 操山109号墳 (古墳前期)
103. 操山202号遺跡 (奈良～平安)
104. 網浜茶臼山古墳 (古墳前期)
105. 操山217号遺跡 (旧石器)
106. 操山103号墳 (古墳前期)
107. 湊茶臼山古墳 (古墳中期)
108. 操山206遺跡 (平安～室町)
109. 湊荒神遺跡 (奈良～室町)
110. 大塚山遺跡 (鎌倉～室町)

図1 周辺遺跡分布図 (縮尺1/50,000・1/3,750,000)

における古墳の消長と軌を一にして衰退する。

古代国家完成期の政治状況を反映する国府や寺院関連遺跡として、旭川東岸では、備前国府の関連官衙と考えられるハガ遺跡²⁸、創建期が飛鳥時代にさかのぼり平城宮式瓦も出土した賞田廃寺²⁹、総柱建物や道路、「上三宅」や「市」が書かれた墨書土器、「官」の刻印須恵器などが検出された百間川米田遺跡³⁰などがあげられる。また、旭川河口付近では、平城宮式瓦が確認されている網浜廃寺³¹が知られる。その対岸、旭川西岸では8世紀の火葬遺構などが報告された新道遺跡³²、その西500mに8世紀後半の井戸から絵馬が出土した鹿田遺跡³³が位置する。これら旭川河口における活発な人間活動が、本遺跡との関わりの深い「鹿田庄」成立の重要な要因になった可能性も考えられる。

平安～鎌倉時代には、地割りを手がかりにした歴史地理の研究³⁴や発掘調査成果から、摂関家殿下渡領に比定される、「鹿田荘」が鹿田遺跡周辺で展開したとみられる。遺跡の詳細は後述するが、同一地域に所在する新道遺跡では12世紀後半頃の井戸から「□□御庄久延弁」と書かれた木簡が出土したほか、南東600mの旭川河口岸に位置する二日市遺跡でも井戸などが確認されている³⁵。旭川東岸では、百間川遺跡群³⁶において該期の集落遺跡が知られている。こうした状況は、鎌倉時代における溝の大形化などにみる集落景観の変化を経て室町時代にも概ね継続する。

以後、戦国時代にかけても鹿田遺跡では大形の溝に囲まれた屋敷地の存在が認められるが、該期の集落状況がわかる遺跡は少ない。旭川東岸の中島遺跡³⁷、東岡山遺跡³⁸で、中世後半～近世の井戸、溝などが確認されている。

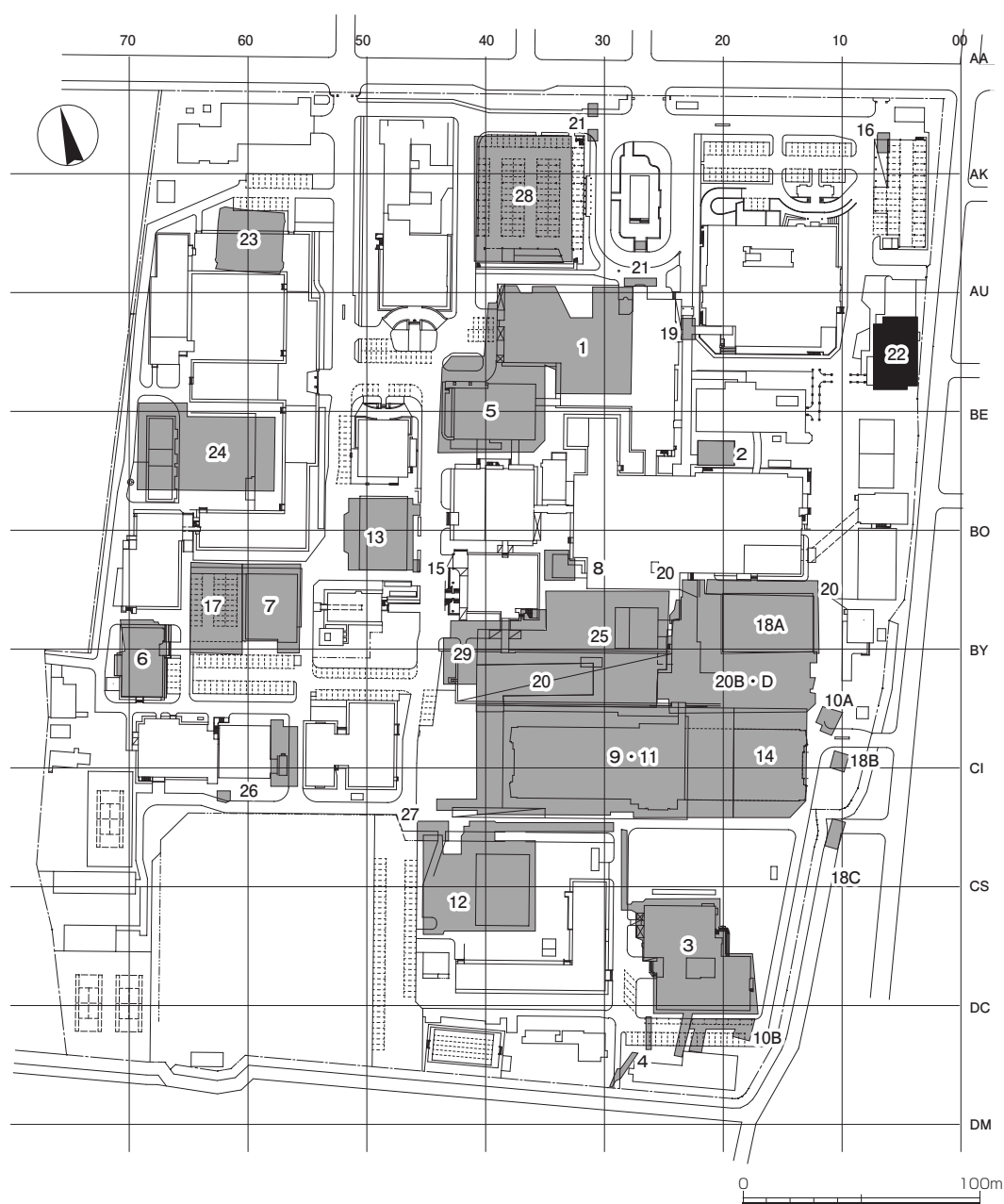
江戸時代には、岡山城や城下町の整備に伴う集落の再編、あるいはその後の海浜部での大規模な干拓によって、鹿田遺跡周辺の状況は大きく変化する。海岸線は南へと後退し、鹿田遺跡周辺は一部を残して、屋敷地から耕地が広がる農村地帯へと変貌を遂げる。その後、1921（大正10）年に、岡山大学医学部および同附属病院の前身である岡山医学専門学校や岡山県立病院が建設された。これに伴って、遺跡は厚さ0.6～1mの造成土に覆われた。現在、都市開発の進行によって遺跡周辺は市街地となっている。

第2節 鹿田遺跡

1. 構内座標の設定

本部門では、岡山大学鹿田地区構内において、周囲の市街地および構内建物の主軸に合わせた構内座標を設置して調査および記録を行っている（図2）。この構内座標は1983年から2002年度までは日本測地系による国土座標第Ⅴ座標系に基づいて、南北・東西軸座標値（ $X = -149,800\text{m}$ 、 $Y = -37,400\text{m}$ ）を原点とし、南北軸を $N-15^\circ-E$ に振ったものを使用していた。その後、2002年4月1日に改正された測量法の施行に伴い、2003年度以降に刊行する報告書では世界測地系へ変更することとし、日本測地系によって設定した構内座標系を踏襲したまま、日本測地系に基づく座標値のみを世界測地系の座標値へと変換することとした³⁹。すなわち、地図上に投影される局地座標系の相対的位置関係を保持したまま、座標値のみを世界測地系へと置き換えることとしたのである。その結果、構内座標の原点は、 $X = -149,456.3718\text{m}$ 、 $Y = -37,646.7700\text{m}$ の数値にあたることとなった。ただし、日本測地系と世界測地系では、基準となる楕円体や測地座標系が異なるため、両者の座標軸は一致しない。したがって、日本測地系に基づいて設定した局地座標を用いる本構内座標の北は日本測地系に基づく座標北であり、世界測地系の座標北とは異なる。

構内では座標原点から一辺5mの正方形の区割りを設定し、原点を通る東西ラインをAA、それより南へ5mごとの東西ラインをAB、AC…AZ、BA、BB…のごとく附番し、また原点を通る南北ラインを00、それより西へ5mごとの南北ラインを01、02、03…と附番する。これらのラインによって掲載される5m四方の区画名は、そ



- | | | |
|---------------------|-----------------------|-----------------------------------|
| 1 第1次調査：外来診療棟 | 11 第11次調査：病棟 | 21 第21次調査：外来診療棟周辺他環境整備 |
| 2 第2次調査：NMR-CT室 | 12 第12次調査：エネルギーセンター | 22 第22次調査：地域医療総合支援センター
(本調査地点) |
| 3 第3次調査：医療短期大学部【校舎】 | 13 第13次調査：総合教育研究棟 | 23 第23次調査：JFホール |
| 4 第4次調査：医療短期大学部【配管】 | 14 第14次調査：病棟 | 24 第24次調査：医歯薬融合棟 |
| 5 第5次調査：管理棟 | 15 第15次調査：総合教育研究棟【外溝】 | 25 第25次調査：中央診療棟（Ⅱ期） |
| 6 第6次調査：アイソトープセンター | 16 第16次調査：立体駐車場エレベーター | 26 第26次調査：動物実験施設 |
| 7 第7次調査：基礎研究棟 | 17 第17次調査：基礎研究棟 | 27 第27次調査：自家発電設備 |
| 8 第8次調査：RI治療室 | 18 第18次調査：中央診療棟 | 28 第28次調査：アメニティモール |
| 9 第9次調査：病棟 | 19 第19次調査：渡り廊下 | 29 第29次調査：臨床検査センター |
| 10 第10次調査：共同溝関連 | 20 第20次調査：中央診療棟関連 | |

※建物名称は調査次の呼称による。

図2 発掘調査地点と構内座標（縮尺1/3,000）

の東北コーナーで交わる2方向のライン名を組み合わせ、AA00区、AB01区…と呼称する。

2. 遺跡の概要

鹿田遺跡では、2021年度までに29次にわたる発掘調査が行われている。その成果から概略をまとめよう。

【地形環境】

本遺跡は、旭川河口付近に形成された砂州状地形に位置し、臨海性の高い集落遺跡と評価される。ただし、弥生時代後期～古墳時代初頭では、第9次・第11次調査⁴⁰⁾、第14次調査⁴¹⁾において水田域が、居住域（第1次・第2次調査⁴²⁾）の南側に確認されるなど、海岸線まで一定の距離があったことが想定される。

ここで、本地点に集落が形成される弥生時代中期後葉以前の状況を整理しておこう。最も古い時期の遺物は、第1次調査で確認された縄文時代中期末～後期前葉の土器片である。続いて、弥生時代早期・前期の土器片があげられる⁴³⁾。数はそれぞれ1点程度と、該期の人間活動は希薄であった可能性が高いが、各時期において多少なりとも陸地が存在していたことも示唆している。近年実施されたボーリング調査成果では、縄文海進によって縄文時代早期には海面下となった鹿田遺跡の環境は、同前期～後期中葉には砂堤状の陸域となり、その後（同後期末）の海域環境を経て、弥生時代前期頃に、再度陸域へと変化していたことが指摘されている⁴⁴⁾。この成果は、出土遺物の時期とも概ね整合的で、鹿田遺跡が河口付近に形成された高まりのなかの一つに立地していたことを示す。

また、地形面での大きな変化が弥生時代中期中頃～後期初めに起きたことがわかってきた。同時期に急速な土砂の堆積が微高地を形成したことが第23次調査⁴⁵⁾で確認され、中期中頃に河道が多量の土砂によって埋没している様子が第12次調査⁴⁶⁾等でみつまっている。こうした沖積作用の進行が、本地点における微高地形成に大きな影響を与えたことは、その後の集落形成からも窺うことができる。旭川西岸部のなかで、弥生時代中期後葉～古墳時代初頭における本地点周辺の地形は、北側に広がる遺跡分布域とは切り離され、海に突き出したような状態が復元される。

こうした状況は、遺跡北側の調査からも追認される。第16次調査⁴⁷⁾、第21次調査⁴⁸⁾、第23次調査では、最も安定した微高地である第1次調査地点の北側で、長期にわたって存在する深い谷地形あるいは河道が検出された。同エリアが日常的に利用されるのは、平安時代後期～鎌倉時代初頭以降である。実際、本遺跡から北500mの大供中道遺跡⁴⁹⁾では、鎌倉時代（13世紀）の耕作地がみつかり、遺跡北側と一連の平坦な地形へと姿を変えていたことが想定される。

微高地南側も同様で、平安時代前半までは、第1次調査・第2次調査⁵⁰⁾・第5次調査⁴⁸⁾地点付近はその南側と1m程度の比高を有していたが、平安時代後期には屋敷地が広がっており、岡山大学鹿田キャンパスの敷地全体に安定した土地環境が成立していたとみられる。

【集落】

本遺跡において集落が営まれた時期は、弥生時代中期後葉・後期前葉～古墳時代初頭、飛鳥時代、奈良時代後期～平安時代前期、平安時代後期～江戸時代である。遺構・遺物が不鮮明な時期を挟むが、弥生時代中期後葉以降、江戸時代末まで継続的に集落が営まれていたといえよう。

弥生時代中期後葉～古墳時代初頭：中期後葉における居住域は、現状では第1次調査地点に限られ、東西50～60m・南北50m程度の比較的小規模な範囲に居住域が想定される。その範囲は、後期には南側の第5次調査地点、南東側の第2次・第18次調査地点⁴⁹⁾、東側の第19次⁵¹⁾・第22次調査（本地点）⁵²⁾地点へと広がり、東西220m・南北100mの範囲を占める。また、その居住域の南側には前述の通り、水田域が形成される（第9次・第11次・第14次調査地点）。

古墳時代初頭には、これら居住域のうち東側（第22次調査地点）の遺構は姿を消し、西～南側に新たな広がり

を見せる。なかでも、西側の第7次調査⁵²・第17次調査⁵³地点では堅穴住居や井戸が、第12次・第13次⁵⁴・第18次～第20次調査⁵⁵各地点では土器溜まりが確認されている。

居住域で検出された主な遺構は、堅穴住居・掘立柱建物・井戸・土坑・土器棺・土器溜まりである。また、集落は堅穴住居3～5棟前後で構成された可能性が高く、弥生時代後期末～古墳時代初頭には、柱穴をもたない小規模な住居や井戸の数が増加する。一方、土坑は弥生時代後期後半以降、その数を大幅に減じ、それに入れ替わるように土器溜まりが増加する。出土遺物の構成にも甕の増加など、新たな動きが認められる。また、第17次調査では、古墳時代初頭に位置づけられる炉や焼土集中域もみつかり、集落内で多様な手工業生産が実施されていたことを窺わせる。

そのほか特徴的な遺物として、製塩土器や土錘・石錘、四国地域との関係を示す弥生時代後期の甕（第1次調査）、古墳時代における畿内地域・山陰地域・阿波地域などからの搬入土器があげられる（第12次・第24次調査）。このように、本遺跡は旭川西岸における集落の中で、臨海の集落として一定の役割を担っていたと考えられる。

古代（飛鳥時代）：古墳時代前期に集落は姿を消したのち、7世紀前半には第1次・第2次調査地点に小規模な集落が出現する。その広がり、同地点の西側（第23次調査地点）にまで及ぶことも判明している。また、キャンパスの南端、第12次調査地点でも該期の溝が検出されており、少ないながらも土地利用がキャンパス全体にわたっていることが確認された。

古代（奈良時代後半～平安時代前半）：第1次・第2次・第5次調査地点を中心に、庇付き掘立柱建物を含む建物群や、大形の削り抜き井戸枠を備えた井戸で構成される居住域が形成される。8世紀後半～10世紀初めに位置づけられ、遺構の分布範囲は限定的である。一方、同域から約250m南に位置する第4次調査⁵⁶地点では、東西方向の河道に伴って橋脚、杭による護岸が確認されている。とりわけ、橋脚を構成する径30cm前後の大形杭列は、堅固な基礎構造を持つ橋の存在を示しており、人通りの多い交通の要所に構築されていたと判断される。鹿田遺跡が水陸交通の要所として機能していたことを端的に示している。

出土遺物では、木簡・墨書土器・硯などの文字関連資料のほか、黒色土器・丹塗り土器・緑釉の唾壺や石帯など特徴的な遺物が注目される。硯には蹄脚硯が含まれる。また、第24次調査地点では、井戸から2枚の絵馬が重なって出土した。本時期に属する5基の井戸では、削り抜きの井戸枠が設置され、横櫛・刀子・曲物・斎串・モモがセット関係をもって出土する。以上の遺構や遺物の状況は、本遺跡が何らかの管理地的な役割を有し、都とのつながりが強い集落であったことを窺わせる。

中世前半（平安時代後半～鎌倉時代）：10世紀～11世紀初めには、集落は岡山大学鹿田キャンパスから姿を消す。一方、本キャンパスの西側に位置する鹿田遺跡（現・岡山県精神科医療センター）に、同時期の遺構が形成される⁵⁷。鹿田キャンパス内で再び集落が活発化するのには11世紀代だが、新たに形成された11～12世紀の集落は以前とは全く異なる構造を呈する。具体的には、現在に残る地割り方向（北で東に15°傾斜：以下「鹿田地割」と記す）に沿った溝で敷地全体が区切られ、1町を単位とした碁盤の目状の地割りに合わせて屋敷地が配される。その地割は、その後12世紀後葉～13世紀初頭に再編され、新たに造営された大形の区画溝は屋敷地を閉鎖的な空間へと変化させる⁵⁸。

出土遺物では、輸入陶磁器・石鍋・砥石に加えて瓦器・東播系の播鉢などが、遠隔地あるいは近隣地域から持ち込まれており、傀儡回しの到来を予想させる鎌倉時代末頃の猿形木製品（第7次調査）と合わせて、盛んな人の往来、物資の流通を裏付ける。こうした遺物から、海運・水運の結節点に形成された流通拠点としての役割を担う集落の一端が垣間見える。また、瓦や呪符木簡、銅鏡（第6次調査⁵⁹）からは、宗教施設の存在も浮かび上がる。その他に、第25次調査地点では烏帽子を被った状態で埋葬された墓などから、名主層等の存在も想定される。

中世後半～近世（室町時代～江戸時代）：鎌倉時代後葉（13世紀末～14世紀前葉）には、次の時代に向けて屋敷地

の再編が行われる。一部の溝は廃絶し、区画溝は主要な溝に集約される。その結果、溝で区画された屋敷地の面積は拡大する場合が多い。また、集落の配置は、第1次調査地点を中心とする北側域から、その南方の第9次・第11次・第14次・第25次・第20次・第18次調査地点付近に東西方向に並ぶ傾向を強める。

第20次・第18次調査地点では、井戸・土坑が江戸時代後期まで確認されており、この地点で屋敷地が継続していたことをうかがえる。第20次調査B地点の井戸からは、京焼の猿形水滴（17世紀初）のほかにも、肥前磁器の水滴（18世紀代）といった、武家好み・文人好みの品が出土した。また、18次調査B地点では幕末期の船着き場があった可能性が高い。こうした遺構・遺物からは大庄屋の存在が想定される。

この一角を除くと本遺跡の多くの調査地点では、中世後半以降耕作地へと変化する。検出される遺構には畦畔や溝、その脇に並ぶ野壺がある。

近代（明治～大正）：近代においても耕作地としての利用がなされる当地域だが、当時の地籍図や写真、あるいは発掘調査成果から、本地点で屋敷が存在していたことが判明している。その成立期は不明だが、キャンパス内の建物配置図に基づく、1925（大正14）年から1930（昭和5）年にかけて段階的に岡山大学医学部の前身である岡山医科大学へ移管されたようである。

岡山大学医学部は、1870（明治3）年に岡山藩によって開設された岡山藩医学館に端を発する。その後、1880（明治13）年に岡山県医学校、1888（明治21）年に第三高等中学校医学部への改組を経て、1901（明治34）年に岡山医学専門学校として設立される。また、1916（大正5）年に現在の鹿田キャンパス内への移築工事が着工し、1921（大正10）年までにはおおむねの建物が建設されたようである。その後、大学令の公布を受けて1922（大正11）年には岡山医科大学へ改組、1949（昭和24）年の国立大学設置法により岡山大学医学部へ移行した。

【藤原摂関家殿下渡り領「鹿田庄」の成立との関係】

本遺跡は、「鹿田庄」比定地として評価されている。同庄の成立時期については不明な点もあるが、「興福寺縁起」によれば、817（弘仁4）年に興福寺南円堂で行われた法華会の料米72石を「鹿田地子」で充てたとされており⁹⁹、平安時代初期には興福寺と強い関係を有する、藤原摂関家の影響が及んでいたことは十分に予想される。該期の遺構としては、第1次・第2次・第5次発掘調査地点で確認された建物群や大形井戸に加えて、集落の西端に位置する第24次調査地点で検出された井戸があげられる。前述したようにその内部から、2枚の絵馬が重なって出土している。これらの遺構・遺物は、鹿田庄成立期前後における本遺跡の性格を考えるうえで重要な手がかりになろう。

本章は下記既報告の文章をもとに加筆および一部改変したものである。

山本悦世2020「第1章 歴史的・地理的環境」『鹿田遺跡14』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第36冊

註

- (1) 鎌木義昌 1962「第一編 原始時代」『岡山市史（古代編）』
- (2) 富岡直人 1998『朝寝鼻貝塚発掘調査概報』加計学園埋蔵文化財調査室発掘調査報告書2
- (3) a 山本悦世編 1992『津島岡大遺跡3』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第5冊
b 阿部芳郎編 1994『津島岡大遺跡4』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第7冊
c 岩崎志保編 2005『津島岡大遺跡16』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第21冊
- (4) a 二宮治夫編 1985『百間川沢田遺跡2 百間川長谷遺跡2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告59
b 平井 勝編 1993『百間川沢田遺跡3』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告84
- (5) 山本悦世編 2004『津島岡大遺跡14』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第19冊
- (6) a 津島遺跡調査団 1969『昭和44年岡山県津島遺跡調査概報』
b 岡山県教育委員会 1970『岡山県津島遺跡調査概報』
c 島崎 東ほか 1999『津島遺跡1』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告137
d 平井 勝 2000『津島遺跡2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告151
e 島崎 東ほか 2003『津島遺跡4』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告173

- f 岡本泰典ほか 2004『津島遺跡5』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告181
- g 島崎 東ほか 2005『津島遺跡6』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告190
- (7) a 岡田 博編 1998『北方下沼遺跡 北方横田遺跡 北方中溝遺跡 北方地藏遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告126
- b 高田恭一郎編 2000『北方地藏遺跡2 北方藪ノ内遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告149
- (8) a 宇垣匡雅編 1999『百間川原尾島遺跡3』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告88
- b 平井 勝編 1995『百間川原尾島遺跡4』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告97
- (9) a 高畑知功 1988「津島江道遺跡」『岡山県埋蔵文化財報告』18
- b 草原孝典 1999「津島江道（岡北中）遺跡」『岡山市埋蔵文化財調査の概要 1997（平成9）年度』
- (10) a 柳瀬昭彦 1988「中溝遺跡」『日本における稲作農耕の起源と展開－資料集－』日本考古学協会静岡大会実行委員会
- b 柳瀬昭彦 1988「南方釜田遺跡」『日本における稲作農耕の起源と展開－資料集－』日本考古学協会静岡大会実行委員会
- (11) a 岡山市遺跡調査団 1971『南方遺跡発掘調査概報』
- b 岡山市遺跡調査団 1981『南方（国立病院）遺跡発掘調査概報』
- c 柳瀬昭彦・岡本寛久 1981『南方遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告40
- d 安川 満編 2016『南方遺跡』岡山市教育委員会
- e 乗岡 実・高橋伸二 2021『南方（国体開発）発掘調査報告』岡山市教育委員会
- (12) a 高橋 護・正岡睦夫ほか 1972「雄町遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』1
- b 草原孝典 2017『雄町遺跡』岡山市教育委員会
- (13) a 江見正巳ほか 1980『旭川放水路（百間川）改修工事に伴う発掘調査Ⅰ』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告39
- b 正岡睦夫編 1984『百間川原尾島遺跡2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告56
- c 柳瀬昭彦編 1996『百間川原尾島遺跡5』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告106
- d 高田恭一郎編 2008『百間川原尾島遺跡7 百間川二の荒手遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告215
- (14) 内藤善史編 1996『絵図遺跡 南方遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告110
- (15) a 中野雅美 1984「上伊福（ノートルダム清心女子大学構内）遺跡」『岡山県埋蔵文化財報告』14
- b 中野雅美・根木 修 1986「上伊福九坪遺跡」『岡山県史 考古資料』
- (16) a 扇崎 由 2015『上伊福（済生会）遺跡1』岡山市教育委員会
- b 扇崎 由 2016『上伊福（済生会）遺跡2』岡山市教育委員会
- c 扇崎 由 2017『上伊福（済生会）遺跡3』岡山市教育委員会
- d 扇崎 由 2018『上伊福（済生会）遺跡4』岡山市教育委員会
- e 扇崎 由 2021『上伊福（済生会）遺跡5』岡山市教育委員会
- (17) a 杉山一雄編 1998『伊福定国前遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告125
- b 金田善敬編 2005『伊福定国前遺跡2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告188
- c 亀山行雄編 2010『伊福定国前遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告224
- (18) 草原孝典編 2023『南方釜田遺跡』岡山市教育委員会
- (19) 吉留秀敏・山本悦世編 1988『鹿田遺跡Ⅰ』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第3冊
- (20) a 出宮徳尚 1986「天瀬遺跡」『岡山県史 考古資料』
- b 杉山一雄ほか 2001『天瀬遺跡・岡山城外堀跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告154
- (21) 高畑知功 1982『百間川兼基遺跡1・百間川今谷遺跡1』岡山県埋蔵文化財調査報告51
- (22) 宇垣匡雅 1990「網浜茶臼山古墳・操山109号墳の測量調査－吉備の前期古墳Ⅲ－」『古代吉備』第12集
- (23) 松木武彦 1993「岡山平野における弥生～古墳時代の地域集団」『鹿田遺跡3』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第6冊
- (24) 神谷正義・安川 満 2007『神宮寺山古墳 網浜茶臼山古墳』
- (25) a 西谷真治・鎌木義昌 1959『金蔵山古墳』岡山市教育委員会
- b 宇垣匡雅 2008『金蔵山古墳』岡山市教育委員会
- c 安川 満・寒川史也 2019『金蔵山古墳』岡山市教育委員会
- (26) a 近藤義郎 1986「湊茶臼山古墳」『岡山県史 考古資料編』
- b 安川 満 2013『湊茶臼山古墳』岡山市教育委員会
- (27) a 近藤義郎 1988「岡山市津島の俗称「おつか」と称する前方後円墳についての調査の概略報告」『古代吉備』第10集
- b 野崎貴博 2023「岡山市北区津島福居の前方後円墳－お塚様古墳と塚前古墳－」『古代吉備』第34集
- (28) 草原孝典 2004『ハガ遺跡』岡山市教育委員会
- (29) 高橋伸二 2005『史跡賞田廃寺跡』岡山市教育委員会
- (30) 岡山県教育委員会 1982『百間川当麻遺跡2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告52
- (31) 中野雅美 1977「吉備における平城宮式瓦について」『川入・上東』岡山県埋蔵文化財報告16
- (32) 草原孝典 2002『新道遺跡』岡山市教育委員会
- (33) 南健太郎 2018『鹿田遺跡11』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第33冊

- 54) a 山本悦世 2007「中世の集落構造と推移－鹿田遺跡の場合－」『鹿田遺跡5』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第23冊
b 山本悦世 2015「鹿田遺跡の土地区画と岡山平野の条理関連遺構」『条里制・古代都市研究』30 条里制・古代都市研究会
- 55) 出宮徳尚 1985「岡山県二日市遺跡」『日本考古学年報』3
- 56) 柳瀬昭彦編 1996『百間川原尾島遺跡5』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告106 ほか
- 57) 河田健司・岡本芳明 2011『中島遺跡』岡山市教育委員会
- 58) 草原孝典 2007『東岡山遺跡』岡山市教育委員会
- 59) 光本 順 2004「日本測地系から世界測地系への移行に伴う構内座標の変更について」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2002』
- 40) 山本悦世 2017『鹿田遺跡10』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第32冊
- 41) 岩崎志保 2014『鹿田遺跡8』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第29冊
- 42) 山本悦世ほか 2019「岡山平野における環境復元へのアプローチ」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2017』
- 43) 南健太郎 2016『鹿田遺跡9』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第31冊
- 44) 野崎貴博 2021『鹿田遺跡15』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第37冊
- 45) 高田貫太 2006「鹿田遺跡第16次調査」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2004』
- 46) 光本 順 2012「鹿田遺跡第21次調査」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2010』
- 47) 河田健司 2000『大供中道遺跡発掘調査概報』岡山市教育委員会
- 48) 松木武彦・山本悦世 1993『鹿田遺跡3』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第6冊
- 49) a 山本悦世 2008「鹿田遺跡第18次調査」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2007』
b 光本 順 2013「鹿田遺跡第18次調査B／C地点」『鹿田遺跡7』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第28冊
- 50) 野崎貴博 2010「鹿田遺跡第19次調査」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2008』
- 51) 岩崎志保 2012「鹿田遺跡第22次調査」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2011』
- 52) 山本悦世 2007『鹿田遺跡5』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第23冊
- 53) 山本悦世 2020『鹿田遺跡14』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第36冊
- 54) 光本 順 2010『鹿田遺跡6』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第26冊
- 55) a 岩崎志保 2022『鹿田遺跡16』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第38冊
b 山口雄治 2018『鹿田遺跡12』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第34冊
- 56) 山本悦世 1990『鹿田遺跡2』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第4冊
- 57) 河合 忍 2007「総括」『鹿田遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告210
- 58) 松木武彦・山本悦世 1997『鹿田遺跡4』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第11冊
- 59) 鈴木景二 2002「備前国鹿田庄・荒野史料と絵図」『新道遺跡』岡山市教育委員会